一般論文
平成25年10月16日受理

新湊曳山囃子の音楽

「演奏する」視点からみた楽器と曲の特徴

The Musicological Report of the Parade Float Festival in Shin-minato, Toyama

● 島添貴美子／富山大学芸術文化学部
SHIMAZOE Kimiko / Faculty of Art and Design, University of Toyama

● Key Words: Parade Float Festival, Festival Music, Music instrument, Phrase, Toyama

要旨

本論は、富山県射水市新湊地区において伝承される曳山囃子を取り上げ、演奏の視点からみた楽器及び楽器編成の特徴と曲の音楽的特徴を論じた。

新湊の曳山囃子は、笛と太鼓を柱とし、鉦が太鼓のリズムを補強する編成である。また、山町13町のうち現在6町で、三味線が加わり、笛の旋律を補強する。

一般に、祭り囃子というと太鼓や鉦などの打楽器が囃子の主体となるが、新湊の曳山囃子では、笛が囃子を主導する。笛は、周辺地域の曳山囃子や、新湊地区の獅子舞の囃子に比べると低い音高のものが使われることから、曳山には、華やかさよりも、優雅な音色が求められていると考えられる。太鼓は、大太鼓1個の上に3～4個の小太鼓を並べ、一つの木枠に入れたもので、周辺地域では高岡市伏木や射水市海老江でしか見られない特徴のある形態である。

囃子の曲も、13の山町それぞれが20曲前後を伝承し、周辺地域に比べて曲数の多さが際立っている。現行の曳山囃子を分析した結果、曲目と笛の旋律によって、13の山町の囃子は3つのグループに分類できることが明らかになった。このうち、7町（古新町、長徳寺、三日曽根、法土寺町、奈呉町、新町、紺屋町）とサブグループ2町（立町、東町）は、歴史的には菊屋派といわれる囃子の系統を受け継ぎ、1町（荒屋町）は桧物派の系統を受け継いでいると考えられる。また、残り3町（四十物町、南立町、中町）は両方の特徴をもっていることが明らかになった。

1. はじめに

本論は、富山県射水市新湊地区において伝承される曳山囃子を取り上げ、演奏の視点からみた楽器と編成の特徴と曲の音楽的特徴を論じる。

新湊地区の曳山は、1650年（慶安3年）の古新町曳山が創始と伝えられ[1]、富山県内では、高岡の御車山に次ぐ古い歴史がある。現在は毎年10月1日に放生津八幡宮秋季祭礼において曳きまわされる。

曳山と曳山囃子については、植木行宣、入江宣子、田井竜一らによる先行研究があり[2)3)4)]、各地の曳山祭礼の報告書も散見される[5)6)]。富山県内の曳山調査も県や市町村の教育委員会などで行われてきた[7)8)9)]。本論でとりあげる新湊の曳山についても調査報告がでている[10)11)12)]。しかし、富山県の曳山はその造形の素晴らしさゆえにか、曳山そのものの美術工芸的な面に多くの関心が寄せられてきた反面、そこで演奏される囃子については簡単な報告がなされているのみで、演奏方法や音楽分析は皆無に等しい。そこで、本論では音楽行為としての「演奏」の視点から、曳山囃子の特徴を論じる。

本論は、平成21～24年度にかけて行われた射水市教育委員会による「放生津八幡宮秋季祭礼の築山行事・曳山行事」調査に基づく。筆者は調査員として、平成21年度以降、新湊（放生津）地区の13の山町、及び、同射水市海老江地区3町、大門地区4町すべての曳山囃子方に対するインタビュー調査と祭礼調査を行うとともに、平成24年度より新湊地区の山町の一つ、古新町（ふるしんまち）の曳山囃子方において参与観察として曳山囃子の練習に参加し、笛を習っている。本論は、これらの調査で得た資料と経験に基づいている。

なお、射水市教育委員会の調査成果は、『富山県射水市放生津八幡宮　築山行事・曳山行事調査報告書』として平成25年6月に出版されている[13)]。そこで、本論では報告書では紙面に限りがあったために、十分に出すことができなかった分析資料を提示するとともに、これらの資料に基づき、より音楽的な考察を加えた。

2. 曳山囃子の楽器編成

新湊の曳山囃子は、笛と太鼓を柱とし、鉦が付く編成である。さらに、山町13町のうち現在6町では、三味線も加わる。鉦は太鼓のリズムを補強し、三味線は笛の旋律を補強する。

一般に、祭り囃子というと太鼓や鉦などの打楽器が主体であり、山・鉾・屋台の囃子の源流とされる風流拍子物（ふりゅうひょうしもの）も例外ではない[14)]。それに対して、新湊の曳山囃子で囃子を主導するのは笛である。囃子の演奏において、

曲のテンポを決めるのは太鼓だが、笛が吹き始めるのに合わせて太鼓が加わり、曲の始めと終わりは、太鼓の方が笛のテンポに合わせる。

各町の楽器の編成については、次頁の表1「曳山囃子の楽器」の通りである。以下、表1に基づいて楽器の特徴を述べる。

（1）笛

笛は長さ45センチ前後の篠笛・横笛で、吹口1つ、指孔6つである。表1にあるように、新湊の曳山の笛は、5番の笛を使う町が多い。5番の笛とは、笛の端に近い指孔のみを開放した時の音がA（ラ）音になる音高の笛である。5番以外には、半音高い6番や6番より半音高い7番を使う町もある。同じ射水市内の大門、隣接する高岡、あるいは、飛騨の高山などでは、7番の笛が使われていることからも、周辺の地域の曳山囃子に比べて、新湊は音高の低い笛が好まれているといえる。また、新湊では獅子舞を伝承する町も多いが、曳山と獅子舞で笛を使い分ける。獅子舞の笛は7番で華やかな音色なのに比べると、音高の低い笛の曳山囃子は落ち着いた優雅な音色が求められているといえる。

写真1　笛（四十物町）

戦後しばらくは、高岡の笛師が作った笛（「仙」の銘が入る）も使われていたようだが、現在では9割近くの町が、高岡市福岡町の新月乃笛（「新月」の銘が入る）を使っている。新湊の曳山囃子で使われている新月乃笛は、黒地に赤い巻き（和紙を紐状にしたもの）のある神楽笛のようなデザインや巻きの代わりに銀環をはめ込んだデザインの横笛である。新月乃笛の笛師松岡正樹氏によると[*1]、新湊の囃子方は、小売店に卸している既製品ではなく、愛用していた笛を種笛（見本の笛）として、オーダーメイドすることが多いという。また、笛を製作する際は、小学校のリコーダーのようにきっちりとした音高ではなく、ある程度の音高に幅をもたせて、より個性のある音色を出すことができるようにしているという。

荒屋町や同じ射水市内の大門田町では、子供用・練習用として、ダクト付きの横笛を使っている。ダクト付きの笛は、リコーダーと同じで息を吹き込めば音が出るため、近年、日本各地で、ダクト付きの縦笛が使われるようになっている。富山県内の曳山でも、高岡や小矢部では、ダクト付きの縦笛を使っているところがみられる。しかし、ダクト付きであっても縦笛ではなく、横笛を使うところに、新湊のこだわりがあるといえよう。

笛の端に近い指孔から、1，2，3，4，5，6とすると、右手薬指で1、中指で2、人差し指で3、左手薬指で4、中指で5、人差し指で6の指孔をふさぐ。指孔3は、基本的にふさいだ状態で吹く。古新町の囃子方越後好則氏によると、左手親指で笛の横側を体に向かって押さえることで、巡行中、山が振動する中でも、吹口と口がぶれず安定して吹き続けられるという。

写真2　笛と三味線（古新町）

使用する音域は2オクターブで、小泉文夫のテトラコルド理論でいう民謡音階が基本となっていると思われる[*2]。5番の笛の1オクターブの構成音はF♯・A・H・C♯・E・F♯である。ただし、後述のように、最高音だけをF♯より半音高い音Gを使う町も多い。その場合の構成音は、F♯・A・H・C♯・E・F♯／F♯・A・H・C♯・E・Gとなる。これらは指孔の開閉によって出すことができる笛本来の構成音にすぎず、曲によっては、指孔を半分だけ開ける等、構成音にない音を使うことがある。なお、古新町では、低い音域のオクターブは「乙」、高い音域のオクターブは「甲」といい、指使いは同じである。

特記すべき奏法として、指孔の上で指をスライドさせながら音をずり上げる奏法や、下行形の途中から息を強く吹き込んで音高を一オクターブ上げる奏法などがある。いずれの奏法も名称がない。

笛の装飾奏法は、チャリ、キザミ、チャラなどという。本論ではチャリで統一する。同じ音が連続する時、あるいは、長い音の後に入れる細かい装飾音全般を指す。技法としては、指孔を軽く叩くだけのものから、一オクターブの順次下行まで多様である。チャリは装飾なので、本

表１　曳山囃子の楽器

*は未調査または不明を示す　　長さの単位はmm

楽器名	町名	古新町	紺屋町	三日曽根	新町	法土寺町
太鼓	小太鼓の個数	3	4	3	4	4
	小太鼓の音の並び（左から）	低→高（H　D　E）	中→高→中（やや低い）→低	*	*	高→低
	小太鼓の直径	213	左から195、197、195、195	230	左から200、205、205、200	175
	小太鼓の厚さ	110	左から190、190、195、185	130	101	90
	大太鼓の直径	630	650	670	650	648
	大太鼓の厚さ	280	220	250	220	210
	太バチの全長	340	333	350～385	300	330
	太バチの素材等	軽い	子供用軽い	柄が黒いものと木肌のもの	*	たもの木
	細バチの全長	730	652	715～810	690	720
	細バチの素材等	籐	籐（皮をむかずにそのまま使う）	籐に白いビニールテープを巻いている。	*	籐
	枠	高さ　1480　幅880	*	高さ1170	高さ1210 幅1135	*
	備考	新しい方　浅野太鼓製胴の部分に「古新町曳山囃子方　平成11年7月吉日」とあり。 古い方　大太鼓　直径590　厚さ250 小太鼓　直径210　厚さ115（3つとも）　枠　高さ　1440（斜め）　幅910 ・左からG　A　H（低→高）	大太鼓と中（やや低い）小太鼓が1オクターブ。浅野太鼓製。町が作って、社中に貸している。	太鼓の枠部分に、昭和52年、大太鼓の胴部分に昭和28年10月の記録と人名あり。小太鼓は昭和52年製、大太鼓は昭和24年。	—	—
笛		新月5	6（門島さんの手製）全長　415～488、吹口から指孔の間　140	新月5	新月6	新月6（以前は5）
	装飾の名称	チャリ	*	チャリ	*	*
鉦	鉦の直径	内径117　外径140	内径140 外径168	170	*	古い鉦　外径157、内径129 枠　高さ370、幅290、足325 撥　230　先端に鹿の角、握り手はバレン製 10年くらい前に作ったもので、それ以前は火箸を使っていた 鉦2　外径168、内径142 枠　高さ400、幅142 撥　225　先端が丸い 鉦3　外径150、内径127 枠　高さ400、幅358 撥　207　ラジオのアンテナのような形状
	鉦の厚さ	25	450	40	*	*
	バチ	全長250	鹿の角	*	*	*
	枠	枠　高さ650、幅217	横363　縦630	高さ535、幅325、鉦の部分の高さ275、2本の紐で鉦を結んでいる	*	*
	備考	・出てきたときに、割れていたのを溶接して使えるようにした ・新しいものが「カンカン」なるのに対して、こちらは「チンチン」となるのでよい 新しい方 内径118　外径142　厚さ28 枠　高さ475　幅200　桴（2本） ・越後さんの手製 ・太鼓屋で鹿の骨の桴を買ったが、音がよくなかったので、作った ・金属部分は電極で、木製の取っ手を削ってつくり、つけた	鉦のフチに、「西村和泉守作　魚屋孫六持　嘉永七寅年四月」と刻んである。鉦は町のもの。	—	—	—
三味線		細棹	あり	あり	中棹	

南立町	立町	四十物町	長徳寺	東町	荒屋町	奈呉町	中町
3	3	4	4	3（以前は4）	4	4	4
*	低→高	高→中→低→中（やや低い）	高→低	低→高	低→高（G　H　C　D）	高→低	低→高
左から175、180、195	200	170	148	左から215、212、213	165	左から184、186、188、182	178
左から150、150、155	90	135	170	130	95	97	85
665	660	640	760	330	600～610	650	575
240	204	250	265	685	250	155	215
340～350	393	415	350	400　380	380	365	*
樫かケヤキ	朴？	草槇	銀杏	*	玉の部分に皮をはる	档（あて＝能登ヒバ）か、朴（ほう）製	*
675	680～713	*	*	643	800	635	*
竹	籐	竹	*	竹	*	籐（とう）製　両端をビニールテープで巻いている。	*
*	*	*	*	高さ1100 幅855	*	*	*
—	浅野太鼓　平成17年製　大太鼓の胴の部分に記載あり。小太鼓は比較的音の高さがはっきりしており、低と中の間が短3度、中と高の間が2度の4度枠の音程になっている。	浅野太鼓	胴に、富山市福荷町（→稲荷町の間違いとのこと）寄贈者の名前あり。胴には記載はないが、昭和22、3年頃に作られたという。皮は2年前に張り替えた。太撥は、昭和28年に作られた。曳山の蝶々を作ったときに余った木で作った	浅野太鼓	浅野太鼓。胴の溝で音を調整・三味線の音にあわせている。 古い方　平成10年に皮の張替え（浅野太鼓で張替え） 大太鼓　直径620、厚さ235 平成10年皮を張替え 小太鼓　4つ　直径170、厚さ95、左から3つ目のみ直径165 大太鼓と左端の小太鼓　9度 小太鼓　左端から低い順にG A　H　C	新しい太鼓　昭和58年。左より高い順に並んでいる。皮の張り具合でドミソシの3度で調整しているというが、音程ははっきりしない。	—
新月7　全長442、吹き口と指穴の間130	新月　全長450、吹き口から指穴の間150 竹製の笛　全長470、吹き口から指穴の間150 ・共有のもの6本　うち1本は新月　残りは知り合いの人が作ったもの（竹製）	新月（先代がつくったもの） 全長422、吹き口と指穴の間150	新月5	新月5	新月5 リコーダー式　新月全長473、吹き口と指孔170	新月　全長450、吹き口と指穴の間150	新月　全長485、吹き口と指穴の間155
*	*	キザミ	*	キザミ	チャリ	チャラ・キザミ	キザミ
外径145、内径105	外径207、内径173	外径170、内径140	直径150、内径127	外径180、内径150	直径（外）150、（内）137	外径155、内径122	*
*	*	*	35	*	30	*	*
全長230　鉄と思われる		ステンレス製の棒　全長215　数本ある。		全長247	*	全長266　先端が丸い　手製	*
高さ450、鉦の部分の高さ220幅286		高さ594、幅366、鉦の部分の高さ350	高さ430、幅275、鉦の部分の高さ230、幅220	高さ351、幅310	*	高さ610、幅255、鉦の部分の高さ275 古い鉦の枠を再利用	*
—	—	—	—	—	—	—	*
				あり	現在なし	現在なし	太棹。門嶋さんは津軽三味線をやっているので、太棹を使う。

来、個人差があるものだが、チャリによっては、奏者間で入れる箇所と入れ方が共有されており、定型化して旋律の一部となっているものがある[*3]。

チャリを入れると、同じ音の連続をタンギングせず、息を吹き続けることができる。笛の奏者は、チャリを入れることでタンギングを避けているといえるが、それだけでなく、チャリをいれることによって、童謡やはやり歌など、曳山囃子に取り入れた曲を曳山囃子らしく聞かせることができる。

（2）太鼓

太鼓は、鋲打ち平胴で、大太鼓1個と3〜4個の小太鼓を木枠に入れて、一セットとしたものを一人で叩く。現在では、石川県白山市の浅野太鼓製が多いが、かつては射水市大門の太鼓屋で作られたものを使っていたという町もある。

写真3　太鼓（三日曽根）

小太鼓は、同じ大きさの胴を皮の張り具合によって音高を変えている町と、胴の大きさ自体を変えることで音高を変えている町がある。例外として、荒屋町の小太鼓は胴の内側に施される中彫りによって音高を調整しているという。

小太鼓の音高は、右から低い順番に並んだもの、逆の順番のもの、高低が順に並んでいないもの、と町によって異なる。特に、皮の張りで音高を調整している場合は、叩いているうちに張りが緩んで音高が下がるため、音高の並びがまちまちになりやすい。

太鼓のバチは2種類あるが、呼び名は特に決まっていないので、ここでは太バチと細バチと称する。いずれも、各町自前で作っている。太バチは、長さ30〜40センチの樫、ケヤキ、草槇（四十物町）、档（奈呉町）、朴、銀杏（長徳寺）などの一木作りで、先端は球状に加工されている。細バチは、60〜80センチの長さの籐か竹をやや湾曲させたものである。町によっては、持ち手が滑らないようにビニールテープ等を巻いている。

後述のように、囃子の曲は、大きく本囃子と雑曲の2つに分けられるが、それぞれのジャンルで、2種類のバチが使い分けられる。

本囃子では曲の開始と終止の合図として、太バチで「ドン」と大太鼓を叩き、曲中では細バチを両手に持って、小太鼓を叩く。その他に、太バチは、曲名に「どんどん」が付く曲で、途中、決まったところで「ドンドン」と入れる。細バチは、笛の音が高い時は高い音高の小太鼓を、低い音には低い音高の小太鼓を叩くのがよいとされる。

雑曲では、太バチを両手に持ち、大太鼓と小太鼓を組み合わせて叩く曲と、太バチ1本と細バチ1本を組み合わせて叩く曲がある。

写真4　太鼓のバチ:　手前から太バチと細バチ（荒屋町）

（3）鉦

鉦は小さいもの（外径14センチ）から大きいもの（外径20.7センチ・立町）まで、町によって多様である。素材も、ステンレス、鉄、木の持ち手に鹿の角など様々である。昔は火箸を代用していたという町も多い。

鉦は太鼓のリズムに合わせて叩く。人手不足や囃子方の演奏スペースである下山が狭いなどの都合で、現在では、小学生男子が担当することが多い。体が小さいので、上山と下山の間の狭い隙間に腰をかけて、鉦を叩く。子供達も鉦をたたけると山にのることができるため、熱心に練習に通う。

写真5　鉦（奈呉町）

（4）三味線

三味線は、一般に、棹の太さによって、細棹、中棹、太棹に分けられる。細棹は繊細な音色に対して、太棹は太くて力強い音色である。新湊で三味線を使用するのは、現在では、古新町、三日曽根、中町、新町、紺屋町、東町の6町であるが、棹の太さは決まっていないようである。例えば、中町は三味線を弾く方が、普段、津軽三味線を弾くので、曳山でも太棹を使用するなど、入手できた三味線を使っている。三味線の調弦は、1と3の糸を、笛の指孔1のみ開けた時の音高に合わせ、二上りで調弦する。二上りは、長唄や常磐津などの三味線音楽において、本調子よりも華やかで、賑やかな曲で使われる調子である。曳山囃子では、5番の笛を使う場合、A（ラ）・E（ミ）・一オクターブ上のA（ラ）で調弦される。

写真6　囃子の練習（東町）

3. 曳山囃子の曲の分類と音楽的特徴

囃子の曲は、新湊では「本囃子」と「雑曲」に分類され、各ジャンルとも、10曲前後が伝承されている。

本囃子は、同じ射水市内の海老江、大門では1曲として扱われ、4～5分程度の長さである。それに比べると、新湊の本囃子は全曲を通して演奏すると約40分になるほど、極端に規模が大きい。

本囃子を曳山囃子の本曲とすれば、雑曲は本囃子以外の曲を意味する。雑曲には、機能的な役割を担う曲と余興の曲に分類できる。以下、本囃子と雑曲の特徴を述べる。

（1）本囃子の特徴

次頁の表2「本囃子の笛の旋律による比較分類表」は、現行の新湊13山町の曳山囃子の本囃子を笛の旋律によって比較分類したものである。筆者は、平成24年より古新町の曳山囃子方で笛を習い、本囃子を数曲吹けるようになった時点で、古新町の本囃子全13曲を五線譜で採譜し、これを参照しながら、全町の音資料を聞いて比較分類した。分析に使用した資料は、平成22年に射水市教育委員会の調査の一環として録画作成された全町の曳山囃子の映像と、聞き取り調査の過程で各町から提供いただいたCD資料の音源である。そのため、現在伝承されていない曲や資料音源のない曲は分析対象外とした。表2の縦の列は笛の旋律が同系統の曲であることを示し、横の列は笛の旋律が同系統の町を隣接させた。

聞き取り調査から、1970年代から80年代にかけて曳山囃子の担い手不足等が生じ、伝承の危機にさらされたり、町を越えた様々な囃子の交流があったりしたことがわかっている[15)]。現行の曳山囃子はその結果が反映されていると思われる。よって、おそらく50年以上前の本囃子の分類は、この表とは若干異なっていただろうと想像される。

表2から、本囃子の特徴は6つ挙げられる。

①伝承曲目によるグルーピング

各町の伝承曲目によって、三つのグループに分類できる。グループ1は「江戸越後獅子」および、「邯鄲（かんたん）」を伝承する町、グループ2は「二つどんどん（佐賀の春）」と「開界（かいかい）」の間に一曲（「八番」）と「四つどんどん（十番）」を伝承する町、グループ3は、いずれも伝承しない町である。

グループ1に該当するのは、古新町、長徳寺、三日曽根、法土寺町、奈呉町、新町、紺屋町の7町である。立町と東町もグループ1の旋律に類似している。グループ2に該当するのは、四十物町、南立町、中町の3町である。このうち、四十物町と南立町は旋律の類似度が極めて高いが、中町は類似度が非常に低い。グループ3は荒屋町の1町である。

②笛の使用音階によるグルーピング

笛の使用音階からみると、グループ1の町は、奈呉町を除くと、民謡音階（5番の笛で、F♯・A・H・C♯・E・F♯）が基本である。それに対して、奈呉町及び、グループ2とグループ3は低いオクターブでは民謡音階で、高いオクターブでは最高音が半音高い音階（F♯・A・H・C♯・E・F♯／F♯・A・H・C♯・E・G）を使う。

③グルーピングと2つの派（菊屋派と桧物派）との関連

新湊の曳山囃子は、歴史上、菊屋派と桧物派があったことがわかっている[16)]。文献資料と聞き取り調査から、グループ1は菊屋派、グループ3は桧物派にあたると思われる。グループ2は、さらに詳細な分析調査が必要であるが、旋律型やチャリの使い方はグループ1（菊屋派）で、使用音階はグループ3（桧物派）と同じである。なお、歴史的には、桧物派と言われる法土寺町[*4]の現行の囃子

表２　本囃子の笛の旋律による比較分類表

注1　平成22年に録画された資料と各町で独自に制作されたCDをもとに比較分析を行った。そのため、現在伝承されていない曲、資料音源がない曲は分析対象外である。
注2　丸囲みの数字は演奏順を示す
注3　縦の列に並んでいる曲は、同系統の旋律であることを示す。
注4　旋律の類似度によってグルーピングしている。

*1　他町で2曲に分かれている旋律が連結して、1曲になっている。
*2　中町は他町との差異が大きいため、最も近いと思われる他町の曲の後欄に配列している。これは、暫定的な位置であるため、今後のより詳細な分析によって位置づけが変わる可能性が大きい。
*3　暫定的な位置であるため、今後のより詳細な分析によって位置づけが変わる可能性が大きい。

グループ	町名↓	曲名→									
グループ１	古新町	（前奏）	①嘉和楽恵比須		②神楽	③万歳どんどん	④仮名和		⑤唐加茂辞		⑥神楽どんどん
	長徳寺	（出囃子）	①嘉和楽恵比須		②神楽	③万歳どんどん	④仮名和		⑤唐加茂辞		⑥神楽どんどん
	三日曽根	①嘉和楽恵比須 *1			②神楽	③万歳どんどん	④仮名和		⑤唐加茂辞		⑥神楽どんどん
	法土寺町	①嘉和楽恵比須 *1			②神楽	③万歳ドンドン	④仮名和		⑤唐加茂辞		⑥神楽どんどん
	奈呉町	①交楽恵比寿	②恵比寿大黒		③賀来楽	④万才どんどん	⑤仮名話		⑥唐加茂辞		⑦神楽どんどん
	新町	①可佐神楽	②交楽恵比寿		③神楽	④万歳どんどん	⑤仮名話		⑥唐加茂辞		
	紺屋町	①可佐神楽	②交楽恵比寿		③神楽	④万歳どんどん	⑤仮名話		⑥唐加茂辞		
	立町				①神楽	②万歳どんどん	③仮名話				
	東町				①賀来楽	②万歳どんどん	③仮名和				
グループ２	四十物町	①一番	②二番		③三番	④四番	⑤五番		⑥六番		
	南立町		①二番		②三番	③四番	④五番		⑤六番		
	中町 *2	①一番		②二番				③三番			
グループ３	荒屋町	①可佐神楽	②嘉和羅恵比寿		③神楽	④万才楽	⑤鐵和			⑥羽衣 *3	

は三日曽根に最も近い。その理由は、現在の囃子方が、荒屋町の生地行男氏から習ったことがきっかけである可能性が推測される。同じ荒屋町の明川博氏（昭和６年生）によると、明川氏と生地氏は若い頃に、三日曽根の廣原氏に曳山囃子を習いにいったことがあったという。明川氏によると廣原氏に習った囃子は、菊屋派の系統と思われるが、荒屋町の桧物派の囃子とは合わせられないくらい異なっていたという。生地氏は、その後、しばらく法土寺町の曳山に乗っておられた[*5]。もし、その頃に生地氏が法土寺町に伝えた囃子が、桧物派の囃子ではなく、三日曽根の廣原氏から習った菊屋派の囃子だったとすれば、現行の法土寺町と三日曽根の囃子が類似していても不思議ではないと思われる。

④開始の曲の扱い

表２のように、本囃子の「嘉和楽恵比須（かわらえびす）」とそれより前に演奏される曲の構成と曲名は、町ごとに若干の違いがある。古新町と長徳寺は、「嘉和楽恵比須」を本囃子の１番とし、それより前に演奏される１曲を番外とし、古新町では「前奏」、長徳寺では「出囃子」などと呼ばれている[*6]。番外とせず、本囃子の１番としている町は６町ある。奈呉町では、同曲を「１番　交楽恵比須（かわらえびす）」とし、他町の「嘉和楽恵比須」に当たる曲を「恵比寿大黒」としている。新町、紺屋町、荒屋町の３町は「可佐（かさ）神楽」と呼び、四十物町、中町の２町は「一番」と呼ぶ。なお、三日曽根と法土寺町は、これら２曲を合体させて１曲とし「嘉和楽恵比須」として伝承している。東町と南立町は、「嘉和楽恵比須」より前の曲をもたない[*7]。

⑤最後の曲の扱い

表２のように、本囃子の最後の曲も若干のバリエーションがある。別曲扱いなのに、同じ「桜揃い（え）」という名称をつけている町が多いが、後の「桜揃い（え）」を「出口囃子」とする町もある。

⑥曲同士の関連性

本囃子の笛の旋律は、囃子方の間では「油断すると他の曲にいってしまう」と言われるもので、同一の、あるいは類似したフレーズが頻出する。

詳細は別稿にゆずるが、古新町を例にとると、「（前奏）」と12番「桜揃い」は、11番「桜揃い」と共有するフレーズが多い。また、３番「万歳どんどん」と６番「神楽ど

	⑦江戸越後獅子	⑧邯鄲	⑨二つどんどん				⑩開界			⑪桜揃い		⑫桜揃い
	⑦江戸越後獅子	⑧邯鄲	⑨二つどんどん				⑩開界			⑪桜揃い		⑫桜揃え
	⑦江戸越後獅子	⑧邯鄲	⑨二つどんどん				⑩開界			⑪桜揃い		⑫桜揃い
	⑦江戸越後獅子	⑧邯鄲	⑨二つドンドン				⑩開界			⑪桜揃い		⑫桜揃い
	⑧江戸越後獅子	⑨感譚	⑩佐賀の春				⑪開界			⑫桜揃い		⑬桜揃い
	⑧江戸越後獅子	⑦感譚	⑨佐賀の春				⑩開界			⑪桜揃え		⑫桜揃え（出口囃子）
	⑧江戸越後獅子	⑦感譚	⑨佐賀の春				⑩開界			⑪桜揃え		⑫桜揃え（出口囃子）
			⑨二つドンドン									
			⑦七番		⑧八番		⑨九番	⑩十番（四つドンドン）		⑪十一番		⑫十二番
			⑥七番		⑦八番		⑧九番	⑨十番				
④四番				⑤五番		⑥六番			⑦十番		⑧十一番	
			⑦鶴乃巣籠				⑧開界			⑨桜揃え		⑩出口囃子

んどん」も共有するフレーズが多い。そこから、「（前奏）」と12番は、11番から派生し、6番は3番から派生した可能性がある。

3番「万歳どんどん」と9番「二つどんどん」のフレーズは、他の曲でも断片的に表れることが多い。法土寺町では「万歳どんどん」と「二つどんどん」が基本だという[8)]。たしかに、この2曲は、フレーズが他の曲でも多用されるので、本囃子の基本曲と考えてよいかもしれない。

一方、2番「神楽」のフレーズは他の曲ではほとんど共有されない。古新町では、「神楽」と「万歳どんどん」が基本だという。他の曲と共通のフレーズが少ない曲と多い曲をそれぞれ習得すると、本囃子全体を把握できるという考え方であると思われる。

（2）雑曲の特徴

雑曲は、機能的な役割を担う曲と余興の曲に細分できる。雑曲の笛の旋律は、各町で共通しており、町ごとの差異は本囃子ほど著しくない。

①機能的な曲

機能的な曲は、神社や祠の前で演奏する「お神楽」、祝儀をもらった家の前で演奏する「チンチコ」、角を曲がる時に演奏する「弥栄（いやさか）」、内川にかかる橋を渡る時に演奏する「見渡せば」、曳山をバックさせる時及び（あるいは）、戻り山の時に演奏される「戻り囃子」の5曲である。これらの曲は、曳山囃子固有の曲と考えられており、余興の曲に比べると、曳山囃子の曲目としての成立が古いと思われる。本囃子と同じ定型のチャリが随所に入れられ、チャリが旋律化している部分が多々みられる。また、同地の獅子舞の曲にも類似した旋律がみられる。このことから、機能的な曲は、本囃子や獅子舞の曲との繋がりが推測される。

②余興の曲

余興の曲は、「銀囃子」のように、機能的な曲と同様に定型のチャリやチャリの旋律化といった曳山囃子的な音楽的特徴をもつ曲もあるが、その多くは、民謡や童謡やはやり歌などから取り入れられている。これらの曲は、時代遅れになると演奏されなくなったり、時代にあった新しい曲が取り入れられたりしており、現在でも変化し続けている。昨今では、軍歌の演奏が減ってきている代わりに「もしもしカメよ」や「夕焼け小焼け」などの童

謡や、コキリコといった富山のご当地民謡の演奏が増えている。また、おそらく、現行の曳山囃子で取り入れられている最も新しい曲は、立町による、J-POPグループWhiteberryのヒット曲「夏祭り」（2000年）だろう。

取り入れられた曲は、本囃子や機能的な雑曲では使われない音や音型が出てくる[*9]。そのため、笛はチャリをうまく入れながら曳山囃子風にアレンジする。中でも、曳山囃子として完全に定着している「宮づくし」は、旋律の原形が一部わからなくなるほどアレンジが加えられている。この曲は、もともと明治時代に作られた軍歌を借用したわらべ歌で、「一番はじめは一の宮」という名称で、明治後期から昭和にかけて日本中で流行した。「宮づくし（一番はじめは一の宮）」の元の旋律は、同じ音で刻む付点リズムを多用する。前述のように、曳山囃子の笛は同じ音が連続する時、タンギングを避けてチャリを入れる。同じ音の連続が多い「宮づくし」は、必然的にチャリが多くなるため、より曳山囃子らしく聞こえる。

（3）祭礼の際の演奏

祭礼の日の曳山の巡行は、各町から放生津八幡宮へ向かい、八幡宮でお祓いを受けると、13の山町を中心に巡行し、最後に放生津八幡宮で曳き別れて、各町へ戻る。曳山の巡行中、本囃子をはじめから順番に演奏し、それを何度もくり返すのが基本である。しかし、巡行中は、祝儀をもらった家、神社や祠の前、橋の上、角を曲がる時に、それぞれ「ちんちこ」、「お神楽」、「見渡せば」、「弥栄」と機能的な雑曲を途中ではさんでいくため、本囃子はしばしば中断される。中断された後は、リーダー役である笛の奏者の裁量によって、中断した曲の頭から演奏する、中断したところから演奏する、中断した次の曲の頭から演奏するなどして、本囃子に戻る。なお、夜になると余興の雑曲が増える傾向がみられる。

4. おわりに

新湊の曳山囃子は、笛と太鼓を柱とし、鉦、および、町によっては三味線が加わる編成である。笛は、周辺地域や獅子舞の囃子に比べて音高が低く、華やかさよりも、優雅な音色が求められていると考えられる。太鼓も、大太鼓1個の上に3～4の小太鼓を並べ、一つの木枠に入れたもので、周辺地域では高岡市伏木や射水市海老江でしか見られない特徴のある形態である。

囃子の曲目も、各町それぞれが20曲前後を伝承し、周辺地域に比べて曲数の多さが際立っている。現行の曳山囃子を分析した結果、本囃子の曲目や笛の構成音によって、新湊13の山町の囃子は3つのグループに分類できることが明らかになった。このうち、7町（古新町、長徳寺、三日曽根、法土寺町、奈呉町、新町、紺屋町）とサブグループ2町（立町、東町）は、歴史的には菊屋派といわれる囃子の系統を受け継ぎ、1町（荒屋町）は桧物派の系統を受け継いでいると考えられる。また、残り3町（四十物町、南立町、中町）は両方の特徴をもっていることが明らかになった。

以上、新湊の曳山囃子の音楽的特徴を楽器と曲から概観したが、旋律分析の詳細は別稿にゆずりたい。

謝辞　調査にあたって、射水市教育委員会文化・スポーツ課（平成25年4月より、生涯学習・スポーツ課）の金三津英則氏、尾野寺克実氏（当時）、松山充宏氏に、各町の曳山囃子方との橋渡しと新湊の曳山祭礼に関する資料提供をいただいた。また、新湊曳山協議会と各町の曳山委員会・囃子方の皆様には、インタビュー調査及び祭礼調査の協力・便宜を図っていただいた。中でも、古新町の曳山委員会・囃子方の皆様には今でも大変お世話になっている。この場を借りて、皆様に深謝したい。

注釈

*1　2012年6月28日高岡市福岡町新月乃笛にて、松岡正樹氏へのインタビューに基づく。

*2　短3度のテトラコルドのディスジャンクト形の五音音階。小泉文夫のテトラコルド理論については、小泉文夫『日本伝統音楽の研究』東京：音楽之友社、1958年等を参照のこと。

*3　例えば、古新町ではこのような定型化したチャリは6種類見られる。チャリを含む笛の奏法については別稿で詳説したい。なお、笛の奏法と旋律型の分析については、日本民俗音楽学会第26回東京大会における口頭発表「富山県新湊の曳山囃子の旋律型」で述べた。口頭発表の要旨は『民俗音楽研究』第38号、57-58頁、2013年に掲載されているので参照されたい。

*4　射水市教育委員会の調査の過程で、法土寺町から桧物派であることを示す文書がでてきている。

*5　明川氏のほかに、法土寺町の囃子方へのインタビュー調査でも確認している。

*6　古新町では、この曲は名称がないとみなされており、便宜上「前奏」といったり「0番」といったりする。

*7　東町は、いったん伝承が途絶えた後、約30年前に復活している。そのため、途絶える前の本囃子にはあった可能性がある。

*8　2010年9月28日法土寺町囃子方へのインタビューに基づく。

*9　五音音階やヨナ抜音階だけでなく、七音音階の曲もある。

引用・参考文献

1） 射水市教育委員会編『富山県射水市放生津八幡宮築山行事・曳山行事調査報告書』富山：射水市教育委員会、2013年、26頁。

2） 植木行宣『山・鉾・屋台の祭り：風流の開花』東京：白水社、2001年。

3） 植木行宣、田井竜一編『都市の祭礼：山・鉾・屋台と囃子』京都・岩田書院、2005年（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究叢書1）。

4） 植木行宣、田井竜一編『祇園囃子の源流：風流拍子物・鞨鼓稚児舞・シャギリ』京都・岩田書院、2010年。

5） 犬山市教育委員会編『犬山祭総合調査報告書』愛知：犬山市教育委員会、2005年。

6） 千葉県佐原市教育委員会編『佐原山車祭調査報告書』千葉：千葉県佐原市教育委員会、2001年。ほか

7） 富山県教育委員会編『富山県の曳山』富山：富山県教育委員会、1976年。ほか

8） 城端町曳山史編纂委員会編『城端曳山史』富山：城端町、1978年。ほか

9） 富山大学人文学部文化人類学研究室編『伏木の曳山』富山：富山大学人文学部文化人類学研究室, 1988年（地域社会の文化人類学的調査 4）ほか。

10）新湊市教育委員会編『新湊の曳山』富山：新湊市教育委員会、1981年。ほか。

11）富山大学人文学部文化人類学研究室編『新湊曳山まつり』富山：富山大学人文学部文化人類学研究室, 1997年。

12）橋詰博一『富山県新湊市四十物町曳山物語』私家版、2003年。

13）射水市教育委員会編『富山県射水市放生津八幡宮築山行事・曳山行事調査報告書』富山：射水市教育委員会、2013年。

14）田井竜一「『祇園囃子』の源流―風流拍子物・鞨鼓稚児舞・シャギリ」、植木行宣、田井竜一編『祇園囃子の源流：風流拍子物・鞨鼓稚児舞・シャギリ』京都・岩田書院、2010年、5頁。

15）射水市教育委員会編『富山県射水市放生津八幡宮築山行事・曳山行事調査報告書』富山：射水市教育委員会、2013年、57頁。

16）前掲書、57-58頁。